



地域を守る  
— 地域課題に立ち向かう農家ハンターの軌跡 —

# 地域課題に立ち向かう

みんなの困りごとだった田畑を荒らすイノシシから地域を守り、豊かな地域や里山の姿を模索する農家ハンター。地域住民と力を合わせた捕獲は年間 900 頭にも及ぶ。頂いた命は食肉や製品へと生まれ変わらせ、持続可能 — サステナブル — の輪を広げている。

地域と畑は  
自分たちで守る。

イノシシの被害から地域と畑を守るため、県内の 20〜40 代の若手農家で対策を行う農家ハンター。  
ハンティングを目的としない彼らは、田畑を荒らすイノシシだけを狙う。メンバーは被害の当事者となる農家に限定。猟師や行政任せにせず、自ら畑を守りながら情報や技術を共有し、それぞれの地域を自衛する。

離農への危機感で一念発起

活動の中心的存在は、三角の戸馳島で洋ラン農家を営む宮川将人さんと小田良区でミカン農

家を営む稲葉達也さん。今年 43 歳になる中学の同級生 2 人組だ。「達ちゃんのお母さんの『もう農業はやめようと思うみたい』という一言からこの取り組みは始まりました。」

こう話す宮川さんは、稲葉さんの母親が、収穫目前のミカン園をイノシシに食べ尽くされて気落ちしている上に、山へ入ることへの恐怖心が植え付けられていることを知る。離農につながりかねないと危機感を覚えた宮川さんは、同じ問題意識を持つ仲間と平成 28 年 4 月に農家ハンターを立ち上げ、有志を募った。

最新技術で参入の障壁を下げる

対策の最前線に立つのは稲葉さん。師匠と仰ぐ、熊本県猟友



いなば たつや  
稲葉 達也さん  
プロジェクトリーダー

いのうえ たくや  
井上 拓也さん  
ジビエファーム施設長

おおいけ さよ  
大池 早代さん  
ジビエファーム社員

すずき たけし  
鈴木 剛史さん  
農家ハンター道場研修生

みやがわ まさひと  
宮川 将人さん  
代表



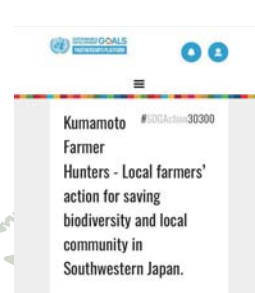
## 農家ハンター

通信技術を取り入れたイノシシの捕獲場所の 3D マップ化や捕獲や出現情報からわなの位置を考えるシステムの運用など、効率的なイ

本拠地・事務局 三角町戸馳島 ジビエファーム内  
受賞歴 「生物多様性アクション大賞 2018」農林水産大臣賞、「第 49 回日本農業賞」特別賞など多数

ノシシ駆除で社会貢献を行う団体。イノシシ対策のモデルを作って全国に広げ、イノシシ被害による離農ゼロを目指す。また、捕獲した

イノシシをジビエなどに有効活用するため、鳥獣解体施設「ジビエファーム」を建設。国際的な食品衛生管理基準に基づき運営している。



2019 年国連の SDGs 優良事例に選ばれた

会三角支部長、山本哲彦さん（68）の下で捕獲技術を磨いてきた。受け継いだ技術や現場での経験は困っている人たちに惜しまなく伝え、被害から救い出す。2 人は、本業があっても取り組み、新しい仲間が参加しやすいように工夫。捕獲用のおり「箱わな」には、出現状況を即時に把握できるカメラを設置し、遠隔監視で見回りの負担を軽減させた。目標物以外が記録されてしまう課題も、イノシシが映った画像のみを自動で抽出し、Twitter に自動アップする技術を企業と開発。実装後も改良を続けている。

## 根付く当事者意識

10 月 16 日、「捕獲したので引き取りに来てくれませんか。」連

絡したのは、不知火町大見区の柑橘農家、河野通尚さん（28）。農家ハンターの一員で、狩猟免許も保有する。

「増える被害に 10 年後の集落の姿が想像できなくなて…。宮川さんの『地域と畑は自分たちで守る。』という言葉に奮起。稲葉さんからノウハウを学び、勉強会も開いてもらいました。

「大見をまもり隊」を結成し、自分たちで駆除します。最近、民家付近にも現れ始めて不安は尽きませんが、目撃情報や捕獲現場などは SNS で注意喚起し、区内で情報共有しています。」

同日、JR 石打ダム駅近くの箱わなに親子イノシシがかかったと、三角町郡浦区の山内晶博さん（51）から電話があった。山内さんも免許を持ち、地域を守る一員。「大きいと手に負えん。処理にも悩む。技術と鳥獣解体施設を持つ農家ハンターの存在はありがたい。でも、地元は自分たちで守らなん。体の許す限り頑張るよ。」と力を込めた。

農家ハンターの本拠地、三角町戸馳島の周辺では、当事者や地区で箱わなを設置し、駆除をすることが珍しくなくなった。



携帯に捕獲の知らせが届く